



発掘調査報告書

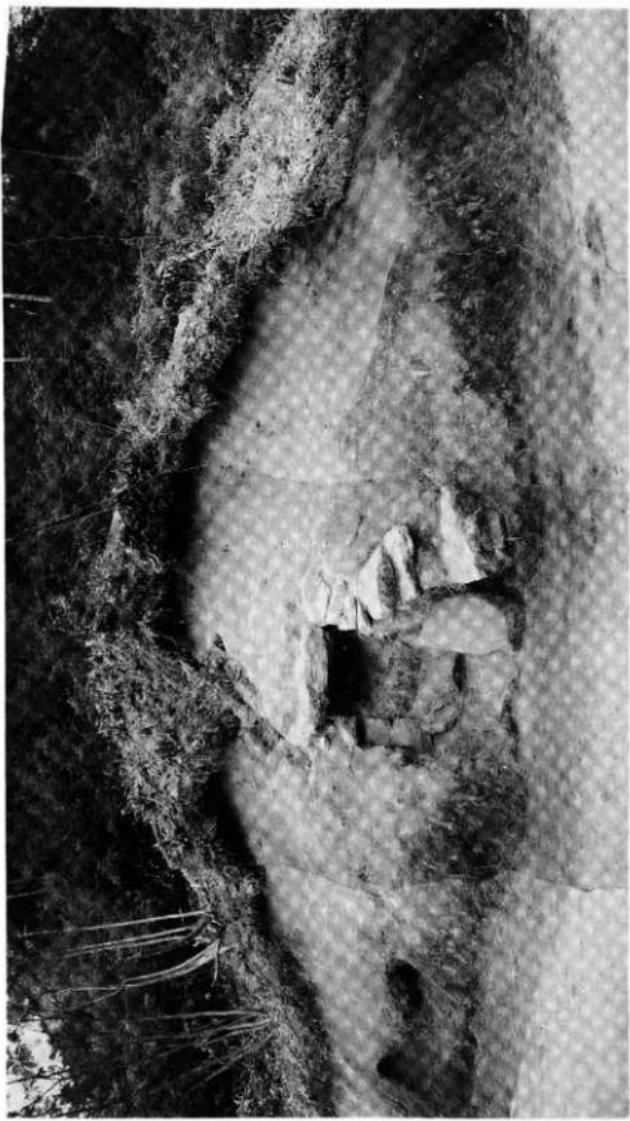
よし が くち
吉 ケ 口 古 墳

1995年2月

島根県

横田町教育委員会

吉ヶ口古墳全景



はじめに

この度、報告書としてまとめました『吉ヶ口古墳』は、古くから地元の人々から“穴観音”と呼ばれ知られていた横穴式石室古墳であり、墳丘及び石室の東側の一部が県道新設の際削られてしまっていたものです。

明治時代より子供達が古墳の内部で遊んでいたということもあり、埋葬品は発見できませんでしたが、石室の一部はよく原状がたもたれており、現存する石室古墳として貴重なものです。ぜひ、県当局のご協力を得て、遺構の保存につとめたいと思います。

なお、今回の発掘調査から本書の作成にいたるまで御協力、御指導いただきました島根県仁多土木事務所をはじめ関係の皆さま方に対し、厚くお礼申し上げます。

平成7年2月

横田町教育委員会

教育長 浅野俊夫

例　　言

1. 本書は横田町教育委員会が、平成6年度に実施した一般県道下横田出雲三成（停）線改良工事にともなう吉ヶ口古墳の発掘調査報告書である。この古墳は島根県仁多郡横田町大字大谷字穴觀音1405番地1に所在する。

2. 調査組織

調査主体者　横田町教育委員会　教育長　浅野俊夫　事務局　尾崎幹雄
調査担当者　島根県文化財保護指導委員　杉原清一
調　　査　員　　(三刀屋町)　藤原友子
調　　査　指　導　島根県文化財保護指導委員　蓮岡法暉
調　　査　作　業　門脇　勇　吉田光男　高野信男
調　　査　期　間　平成6年10月1日～10月10日

3. 本書の執筆は『調査のいきさつ』を尾崎幹雄が、『位置と環境』から『まとめ』までを杉原清一が行い、挿図・淨書は藤原友子が行った。

4. 本書の刊行は横田町教育委員会尾崎が企画・統括し、杉原及び藤原が編集した。

目　　次

はじめ	横田町教育委員会教育長　浅野俊夫
I　調査に至るいきさつ	1
II　位置と環境	1
III　遺構	4
主体部　石室の構築と墳丘　墳丘の築造	
IV　まとめ	8
図版	

I 調査に至るいきさつ

吉ヶ口古墳の調査は、平成元年1月11日に島根県仁多土木事務所より横田町教育委員会に依頼された一般県道下横田出雲三成（停）線道路改良に伴う発掘調査であり、平成元年2月25日に文化庁長官宛てに埋蔵文化財発掘の通知を行ったものである。

その後、道路計画からの古墳の回避等が協議されてきたが、地権者等との交渉がつかずいよいよ平成7年度からの工事実施にむけ今回発掘調査することとなった。

この吉ヶ口古墳は、旧八川村時代の県道工事により墳丘と石室の一部が削りとられ、開口していたことから、地域の人々が観音様を祀ったり、戦前より子供たちの遊び場として使われていたことが、地域の高齢者の皆さんからの話でわかっている。

調査により、この時代の石室については石材等が崩れているものが多い中で、吉ヶ口古墳の場合、石室の石積並びに封土築造の工程が明瞭に観察され、県内においても貴重な事例であることがわかった。そのため、道路のノリ面カット工法からブロック積み工法に変更していただき、できるだけ保存につとめていただくよう島根県と協議中である。

II 位置と環境

1. 立地

吉ヶ口古墳は、横田町大字大谷字穴観音1405-1番地（山林）に所在し、県道三成・八川線に開口している。

この古墳は標高393m、前方谷間の水田からの比高は約10mで、山の南西面中麓あたりに緩斜変換点の地形を選んで造営している。

2. 環境

吉ヶ口古墳の所在する吉ヶ口集落は、斐伊川の支流大馬木川に流れ入る大谷川に沿っており、横田町から仁多町へ東西方向に最短距離で結ぶ谷間の県道が通じていて、仁多町高尾地区へ最も近いところである。

吉ヶ口古墳を中心に約15kmの広い範囲で古墳・横穴の分布について概観すると、およそ次のようである。

大まかに4群の地域的なまとまりがみられる。第1グループは、図1のNo.1~19の大馬

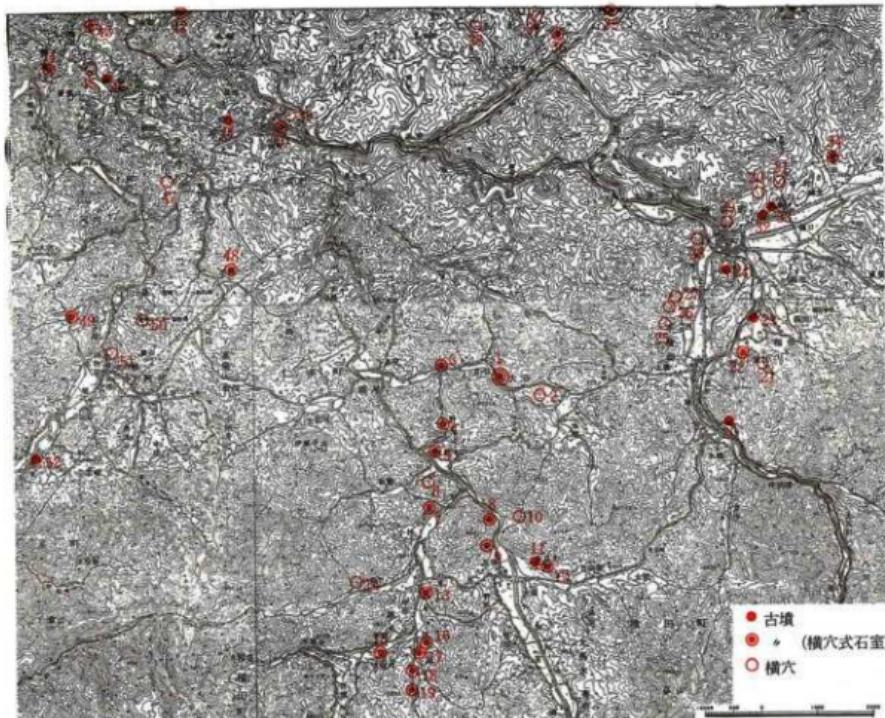


図1. 周辺地域の古墳・横穴群

古墳・横穴一覧(図1)

No.	名 称	概 要	No.	名 称	概 要
1	吉ヶ口古墳		20	古屋上古墳	小形の横穴式石室
2	平ヶ谷横穴	木棺あり 消滅	21	滝ノ谷尻横穴	箱式石棺内外に複数葬
3	太源寺古墳	墳形不明 横穴式石室	22	白石迫古墳	袖無形横穴式石室 外腰列石あり 消滅
4	(野土古墳)	横穴式石室か? 近世消滅	23	手場古墳	小形の横穴式石室か?
5	桃木古墳	狹長な袖無形横穴式石室	24	無量山古墳群	円墳群 組合せ箱式石棺
6	白根垣内横穴	人骨等出土 消滅	25	大船横穴群	2群10穴以上 詳細不明 ほとんど崩壊
7	上市古墳	切石造り横穴式石室一部残存	26	老祖山横穴	開口古く 詳細不明
8	袋尻古墳	小形横穴式石室 小円墳	27	内田宅下横穴	ほとんど埋没
9	(反保古墳)	小形横穴式石室露呈	28	天狗松横穴群	散在 Ⅲ~Ⅳ期
10	觀音原横穴群	3穴以上 詳細不明	29	藤ヶ瀬横穴群	開口古く 詳細不明
11	女良木古墳	横穴式石室 消滅	30	小池奥横穴群	支群もあり 10穴以上 マウンドあり
12	龜井古墳	横穴式石室 ほとんど破損	31	岩屋寺横穴	人骨・玉類多数出土 Ⅲ期 消滅
13	中原古墳	横穴式石室と伝う 埋没	32	愛宕下古墳	墳形・主体とも不詳
14	小森坂本上横穴	2穴以上 消滅	33	勝田裏古墳	円墳 未掘
15	下垣内古墳	横穴式石室か 一部残存	34	大田山古墳群	円墳か 横穴式石室か
16	矢入2号墳	円墳 横穴式石室 大刀など出土	35	梅木原古墳	袖無形横穴式石室
17	* 4 *	横穴式石室破損	36	大原山古墳	横穴式石室か 石材散乱
18	* 1 *	小形の横穴式石室 消滅	37	金床横穴	詳細不明 消滅
19	* 3 *	小形の横穴式石室 消滅	38	こふけ横穴	刀剣人骨出土 消滅

39 (八幡下横穴)	古く開口 破損有し	46 どじや古墳	円墳 詳細不明 消滅
40 鶴屋敷古墳	大形横穴式石室 円墳 移築保存	47 八頭塚横穴群	8穴以上 人骨・刀など
41 丸子山古墳群	円墳2基 木棺古葬 1期 消滅	48 尾白古墳	横穴式石室
42 林原古墳	小形石室残存	49 無木1・2分古墳	小円墳 切石造石棺式石室か
43 六觀1・2号墳	前方後円及び円墳 横穴式石室	50 川子原横穴	人骨2体 刀馬具共出土 消滅
44 光善寺古墳	横穴式石室 部残存	51 下阿井横穴群	人骨・刀など出土
45 北久見原横穴群	4穴以上 改葬の小横穴もあり	52 田川中学校農場古墳	詳細不明 勾玉など出土 消滅

木川に沿って横田町大字大馬木・小馬木地区を中心とするもの。第2グループは、No.20~34の斐伊川上流の横山盆地中心部付近で、さらに東方へも広く分布している。第3グループNo.35~38は、小群ではあるが仁多町大字高田・郡村地区が主であり、第4グループNo.39~48は仁多郡大字三成・三沢・鶴倉地区である。このほか少數で密度も稀薄であるNo.49~52は、阿井川に沿って仁多町大字上・下阿井地区である。

このうち内容の判明するものは約半数であるが、このうち前期古墳は全くなく、中期古墳はNo.41丸子山1・2号墳（須恵Ⅰ期）のみであり、他はほとんど後~末期古墳である。

第4グループは、最も早い中期のNo.41丸子山古墳群や、仁多郡内唯一の前方後円墳であるNo.43六觀1分墳、郡内第2位の規模を有する横穴式石室のNo.40郡屋敷古墳などを含み、早い時期からの古墳と後~末期では格別規模のものがあり、古代三沢郷へと続く有力集落の展開が窺える。

第3グループは図示のほかさらに北方へも分布する一群で、県内でも稀な人物・馬などの形象埴輪を伴い横穴式石室には柱状石に橋石を架した格別の當楽寺古墳（須恵Ⅱ期）や、格外に大きな横穴式石室の岩屋古墳（末期か？）などを含む一群で、のちに仁多郡衙が置かれる三处郷に相当し、他地区に比べて別格的な社会の発展が窺える。

第2グループは図示のほかさらに東方へも広く濃密に分布する。組合せ箱式石棺に女性を複数葬した大呂川向古墳群（須恵Ⅲ期）から、墳丘肩部に点列状の貼石を置き前方には外護列石を積んだ横穴式石室のNo.22白石追古墳（須恵Ⅲ期？）、或は多くの支群をもち頂部にはマウンドを有するNo.30小池奥横穴群（須恵Ⅲ~Ⅳ期）や、副葬品の豊かなNo.31岩屋寺横穴など、後~末期に大きく発展した地域であることを窺わせるもので、横田郷の中心区域に相当する。

第1グループは、大馬木川に所在する名勝「鬼の舌振」によって隔離される最も南の山間に位置する一群で、当該吉ヶ口古墳をはじめ横穴も含めて、すべて須恵Ⅲ期後半~Ⅳ期の限定される期間の造営であるといえよう。古墳はいずれも丘麓・山裾部に背まれた袖無形横穴式石室を主体とし、また副葬品はわずかな須恵器に似合わない大刀等の鉄製武具が特徴的である。大馬木川に沿うこの地域はのちの阿井郷のうち東半分にあたり、さらにその後東阿井村又は馬来郷とよばれる区域に相当する。

III 遺構

狭い谷間に面して丘腹中麓近くに営まれたこの古墳は、明治以前から開口していたと伝えられる。埋葬主体部は横穴式石室で、かつて古墳前庭部あたりを通っていた現県道の拡幅によって、墳丘及び石室の半ばを削り取られている。

調査は保存を考慮して、墳丘の維持後方及び横断上手側にトレンチを掘り、ほぼ横断面に近い道路法面と石室の観察に止めた。

1. 主体部

主体部は南西（S56°W）に開口する横穴式石室である。石室はその前半部分は削り取られて失われているが、奥寄りは残存している。

石室の奥壁は自然石の大板状石を立てて、両側壁は腰石の上に3段の石を小口積みにし、詰め石を置いて天井石を架している。天井石は厚さ15~40cmの板状自然石である。

石室のプランは、奥壁の高さ1.7m 床幅1.35m 天井幅0.85mで、床面は長さ約3.2mまでは側壁の腰石4個でほぼ同じ幅のまま続いている、ほぼここまでが玄室部分と思われる。その前方は現道によって失われていて不明である。また側壁上端は奥寄り約1m部分は残存しているが、その前方は崩れかけ、或は崩壊している。

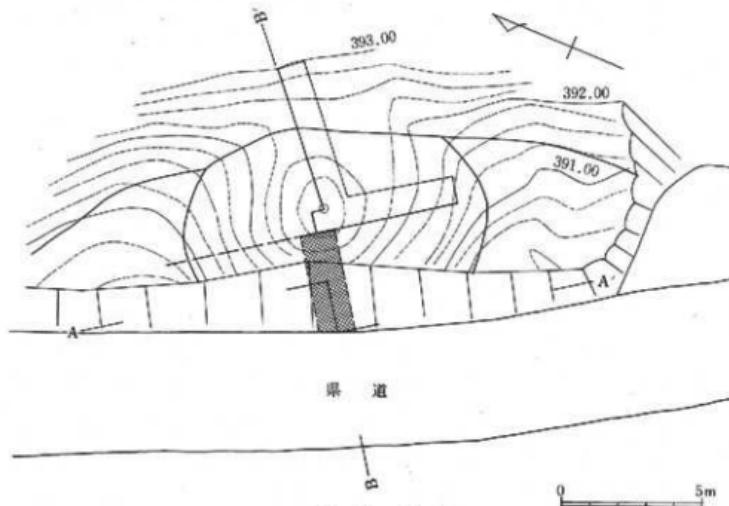


図2. 地形図

天井石は3枚が認められたが、原位置を保つものは奥1枚のみで、前方の石は前方床面に放り出され、中の石は崩れかけて前傾していた。なお、天井高は前方ほど低くなるものようだ。

玄室を区切る柱状石等については痕跡も認められないことから、狭道との区別のつかない袖無し形式の石室プランであったと思われる。

奥壁石は1枚石で、上端がわずかに前方へ湾曲する。

向って右(南東)側壁についてみると、最下段の腰石は、長さ70~90cm高さ40~50cmの比較的大きい石4個を立位に用いて連ねる。2段目は厚さ25cm幅70cmほどの板状石を小口積みとし、さらに3段目、4段目とほぼ同様にセリ出しながら積む。石材は漸次小形となる。そして上端は小さな詰石をして天井石をのせる。なお、この壁面ほぼ中央あたりの2~3段目の石材は風化して崩落したとみられ、失われている。

このように右壁は奥壁から下端で約3m、上端は崩れながらも約2mが残存している。

左(北西)側壁は、最下段の腰石が長さ1.7m高さ70~60mで、右壁と同様に側面を立てて用いる。その上に2段目は厚さ25cm、3段目は30~37cmの石を小口積みとし、さらに4段目は薄手の板状石を小口積みにする。その上に詰石を置いて天井石を架す。この腰石1個分の長さ1.6m部分しか残っていないが、床面の腰石を据えた痕跡から次の石は長さが1.1m以上とみられ、この2石で右壁の4個の長さに近似するものとなる。

天井石は奥1枚のほかは、
ずれたものと落下して放置し
たものの2枚があり、これを
復原的にみると石の幅が奥か
ら90cm・85cm・70cmであり、
この3枚の天井石で奥壁から
約2.5mまでを被っていたも
のとみられる。

床面についてみると、採取
遺物は皆無であり、本来床面
とみられるレベルより約15cm
も凹凸しながら掘り込まれて
おり、後世に乱掘したものと
判った。

なお、この石室に用いられ

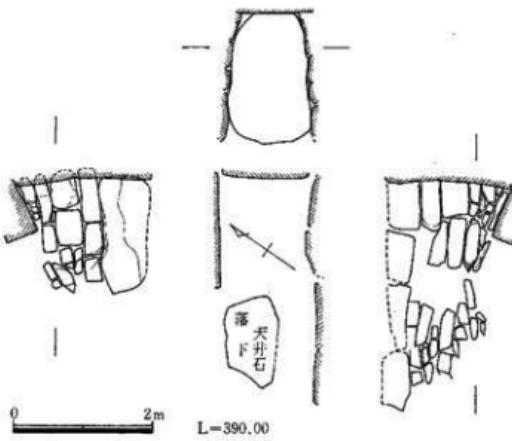


図3. 石室図

た石材はすべて花崗岩であり、そのうち角の磨耗した川石は2個で、他はすべて風化のかなり進んだ山石である。これらに類似する石材は付近の山林中に点在している。

2. 石室の構築と墳丘

古墳の築造は、先ず墳丘後半部分にあたる地山を緩斜に削平し、次いで石室を構築しながら後背部の山裾部から土を削り出して埋め上げ、終りに石室の上方に盛土して整形したものであった。これらの状況は墳丘を横断する道路法面の土層や墳丘後半のトレンチにおいて詳かによみとれる。

1) 選地と地業

谷間に面して比高約10mの中腹部で、わずかに小台地状に張り出す地形を選び、中心となる上面の緩斜部分約8mにわたり、表土を除き地山心土（硬い真砂質）を削り出す。このとき傾斜がやや急になるあたりから奥へ約2mが玄室奥部にあたるように、さらにコ字状に地山面へ掘り込んで主体部の位置としている。

2) 石室の構築

このプランの奥側は奥壁石の厚さを下端幅にとり、約60°の急斜面に削って、そこへ奥壁石を後背上方から滑り下ろして立てる方法である。

この奥壁石を狭むように両側壁の奥の根石（腰石）を同様に滑り下ろして、石材を立位に用いて、奥壁石を両側から押して固定する。そしてこれら3石の裏へ真砂土を填めて埋める。この際裏栗石はほとんど用いてはいない。

側壁はさらに前方へ腰石を同様に据えて裏へ真砂土を詰める。この上に2段目の板状石を小口積みに置き、控えを深くとって並べ、間隙と裏を真砂土で埋め上げる。このように漸次小さい石を用いて、3段目、4段目も小口積みに積み上げ、後背と間隙は真砂土で埋め上げていく。なお、この場合前方は削平された表土（黒色土）の上に真砂土を盛っていくことになる。

かくして側壁高は奥側では奥壁高に達し、前方は漸次低くなる。この上に奥側から天井石を架し、側壁との隙間に小石を裏側から詰めて天井石の上へも盛土していく。次いで2枚、3枚目と前方へ天井石を架し、盛土していく。

3) 墳丘の築造

このようにして石室を築いた後、後方の山裾部を掘削した土を搬出して、墳丘の全面にわたって、少なくとも各々厚さ60cm～1mの盛土を3層積み上げて墳丘を整えている。

墳丘は石室奥端から後背方向へは5.0m、幅1.2mの浅い周溝を造る。墳丘頂部の高さは主体床面から現況で4.3mであり、周溝は最も高くなる後背部で主体部床面から3.1m高い。

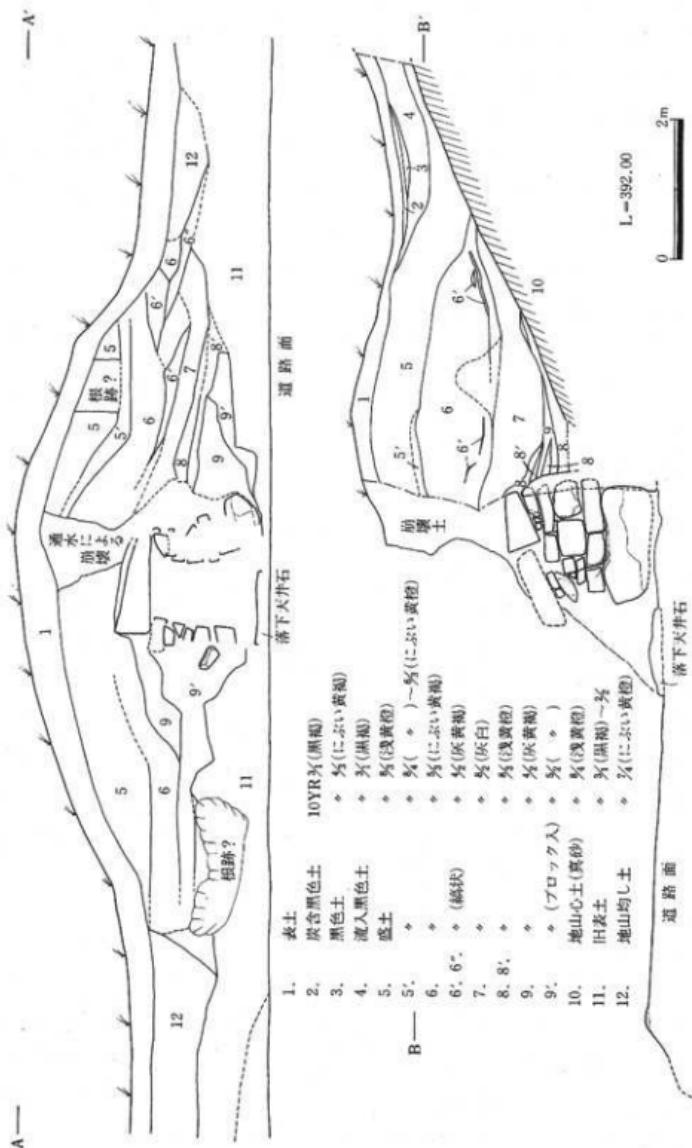


図4. 増丘断面図

石室の奥から1.5m地点での横断面に相当する道路による切り取り崖面では、黒色土の旧表土を地山面として、その上に真砂土の盛土となっており、周溝は南側では6.0m、北側では5.5mに位置し、横径は11.5mとなる。このレベルは主体床面より1.6m高く、後背から1.5mほど下降したことになる。

今これを中央横断面にあたるとすれば、周溝が同じ勾配で下降しながら前庭に至ると、ほぼ主体部床面レベルに合致することになる。この場合、失われた墳丘前端部は石室奥壁から約6mの位置となる。

墳丘の構造は、このように推定も加えてみるならば、墳丘は横径11.5m、前後径11.0m高さ4.3mで、浅く幅広い周溝は後方に高く、下降しながら一周して前庭で合致すると考えられる。

IV まとめ

吉ヶ口古墳は、谷間水田からの比高が約10mと山裾低く張り出す部分に築造した横穴式石室を主体とする円墳で、墳丘は直径約10m強、高さ4.3m以上である。これは広く近隣地域に分布する後～末期古墳に通有の様相といえる。

開口は古く、さらに床面は盗掘によって掘り返され、荒されて遺物は全く残っていないかった。このため時期については明確さを欠くが、近隣地域での石室構造の類似例から大まかに後期末ごろと思われる。

この吉ヶ口古墳は道路工事で墳丘前半は失われたものの、石室及び墳丘築造の手法が良好に観察された。

選地のうち、主体部から後背部の旧表土を除いて地山面を削り出し、主体位置に床面を基準に掘り込み、その後奥壁石及び側壁の根石を滑り下ろして立位に組み、その上の石材は小口積みして裏を埋め上げ、天井石を架ける。このうち後背山裾等を削り出した土で盛土して墳形を整えたものである。

この築造方法は近隣では例えば郡屋敷古墳（仁多町三成）、白石追古墳（横田町稻原）の調査事例と共通するものであり、当地方の後期古墳の一般的手法であったと考えられる。

この古墳の被葬者については何らの手がかりも得られなかったが、立地が耕地の最も少ない谷奥であることなど、平野地帯のそれとは異なる立場の地域の有力者で、例えば当地での製鉄開始期と思われる時期でもあることから、このような関係者であることも想像される。

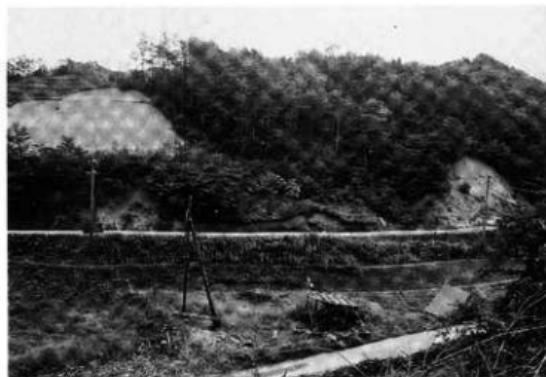
註

- 1) 中浜久善：「出雲地方における後期古墳文化の展開」『松江考古』4号 1981年
- 2) 『郡屋敷古墳』仁多町教育委員会 1986年
- 3) 『大呂川向古墳群・白石迫古墳』横田町教育委員会 1993年

PL 1



古墳遠景



近景





石室奥壁と右壁



石室奥壁と左壁



トレンチ・奥壁後背部

発掘調査報告書

吉ヶ口古墳

1995年2月

発行 横田町教育委員会
島根県仁多郡横田町大字横田1037

印刷 (有)木次印刷
島根県簸石郡三刀屋町1635